

ネットワーク広げ 「知の地域づくり」



本の文化にゆったりと触れることができる「本の学校今井ブックセンター」1階フロア。「今井印刷」が導入した初期のドイツ製自動活版印刷機も展示されている

生涯読書の推進や書店人の職能教育の場である「本の学校」は1995年、山陰を中心に店舗展開する今井書店グループが米子市新開2丁目に設立した。三角屋根の時計塔がそびえる校舎兼実習店舗は、2階に本の博物室・図書室、多目的ホールや研修室を備え、1階に本の売り場がある。2012年には、より中立的で横断的な姿を目指してNPO法人に改組された。

NPO法人の定款には「知の拠点づくり、地域文化の創造と発展に寄与することを目的とする」と活動の指針が示されている。

NPO法人 「本の学校」の事例

■3本の見出し指標に

「この見出しが起点になりました。市民に約束手形を振り出したように思えたのです」
今井書店グループ会長、本の学校理事長の永井伸和さんが、1972年11月の日本海新聞をひらく。今井書店創業100年を記念した座談会特集は書店の役割や山陰の文化振興をテーマに、経済、教育、文化、書店など各界10人の意見を載せている。

「市立の図書館をぜひとも」「地方の出版も盛んにしよう」「文化運動の拠点に」。議論を凝縮したこの3本の見出しは、永井さんらのその後の活動の道しるべとなる。

座談会出席者の一人でもあった永井さんは最年少の30歳。特集を締めくくる発言の中で「（書店には）地域と共に生きるプラスアルファがある。今、書店が何をしているか大いに反省させられます。いつの時代にも変わらぬ文化的役割を再認識しなければならぬと思います」と語っている。

が一館もなかった。図書館と書店は敵同士という見方があるのは日本だけだと永井さんは憂う。「図書館は何より、読者を育ててくれる」。市町村立図書館の整備・充実にも仲間と共に動き、やがて市民運動へと発展する。1978年には、県内初の市立図書館が境港市に開設された。

■原点はクリスマススイブ

その年のクリスマススイブ。振り返れば原点ともいえる活動を、永井さんは自宅のある境港市麦垣町の会館を借りてスタートさせた。自治会や子ども会に呼び掛けて「麦垣児童文庫」を夫婦で立ち上げ、毎日曜日に子どもたちに本を読み聞かせた。

1975年には、鳥取駅前の富士書店の新築に合わせ、児童文庫のモデルとなることを願って「鳥取子ども図書室」を設け、司書を置いて貸し出しを始めた。関心を持った鳥取おやこ劇場の「本の会」のお母さんたち、大学生らが輪を広げ、活動は賛同者の熱意で倉吉市や米子市にも伝播する。

国内初の「本の国体」
本の学校の発足へ至る経過の中で、1987年に鳥取、倉吉、米子の3市で開かれた「本の国体ブックインとっとり・日本の出版文化展」も画期的な試みだった。読書推進、市町村立図書館と地方出版の振興を目的し、国内で初開催。読者、著者、出版社、書店や図書館が一体となり、地方出版を含む優れた書籍3万点余を一堂に集めて、シンポジウムや講演会も催した。

実行委員会が3会場にこしらえた模擬図書館には10日間延べ約6万7千人が訪れた。市民グループと書店組合が運営に携わり、良質な本に触れる機会や情報を地方から発信した。



全国で初めての「本の国体ブックインとっとり'87日本の出版文化展」が県内3会場で開かれた＝1987年10月、米子市



菊池寛賞贈呈式に出席した今井書店グループの（左から）今井直樹副会長、永井会長、田江泰彦社長＝2009年12月4日、東京・虎ノ門のホテル

ない。取次店や問屋に選書を丸投げしているようではだめです。書店員、図書館の司書は互いに切磋琢磨（せつさたくま）して本を選ぶ力を養いたいものです」

日本社会の縦割り構造は書店と図書館の関係にも表れている。『隣村』のことすら知らないようでは……。教育、図書館、書店、古本、マスコミ、映像、文化。こうした業界・分野に横串を通し、自由闊達（かっただつ）に意見を交わす場となつたのが、本の学校が誕生した



出版、図書館、教育、マスコミの各業界人が大山に集った「第1回「本の学校」大山緑陰シンポジウム」＝1995年9月、大山町

1995年から5年間続いた「大山緑陰シンポジウム」だった。

大山と米子の会場で全国の関係者が「21世紀への出版ビジョン」を共に描き、交流した。千葉県の高校教諭が事例発表した「朝の10分読書」はシンポジウムをきっかけに全国に広まる。参加していた流通会社が応援を申し出て、組織的な普及活動に進展。「千葉県で生まれた二十世紀梨が鳥取から広まったのと同じです」と、永井さんは述懐する。

「ローカル対ローカル」

今井書店グループと本の学校は2009年、研修活動などの功績が認められ、菊池寛賞を受賞した。その後、「独立・法人化をもって正式開講する」との目標に向け、大山緑陰シンポジウムに参加した若い世代が主役となって本の学校のNPO法人化へ準備を進め、2012年3月に法人を設立する。

米子と東京を拠点とする本の学校は、大山緑陰シンポジウムの理念を引き継ぐ「出版産業シンポジウム」を2006年から東京で

「本の国体」を機に、実行委員会は地方出版文化功労賞を制定し、翌年から表彰を始めた。地方出版物を一堂に集めて展示する毎年の「ブックイン」とつとり・全国の本展」に併せ、県民が審査し、その年の優秀作を選ぶ。公平性を確保するため、鳥取県からの出版物は表彰対象から除外している。

本の国体、出版文化功労賞いずれにも関わった永井さんは、読書推進・読書環境向上へ「一粒の麦」となった麦垣児童文庫以来、3本の見出しの具体化へと歩を進めていく。

モデルはドイツに

本の学校は、地域住民の生涯読書の推進、出版業界人や書店員の研修講座、出版界や図書館のあるべき姿を問うシンポジウムの開催などに取り組む。今井書店5代目の永井さん、今井直樹さん、田江泰彦さんの従兄弟3人は、3代目の祖父、今井兼文の遺志を継ぎ、マイスター制度のあるドイツの書籍業学校をモデルにした。

「ドイツでは書店が出版社に本を注文しなければ1冊も入らぬ」と、出版文化功労賞を受賞した。2013年は、人と地域から求められる書店像などを考察した。

「ローカル対ローカルで、オープンマインドに交流を広めることも大切です。活動に共感、共鳴してくださる人も増え



約3千㎡の店舗面積を持つ「本の学校今井ブックセンター」は、子どもからお年寄りまで幅広い客でにぎわう今井書店グループの旗艦店

ました」と、永井さんは裾野の広がりを実感する。長野県の塩尻市立図書館は2012年7月、図書館と出版界が協働する「信州しおじり 本の寺子屋」を開講した。本の学校の精神を受け継ぎ、著名作家の講演会や

本の学校とは

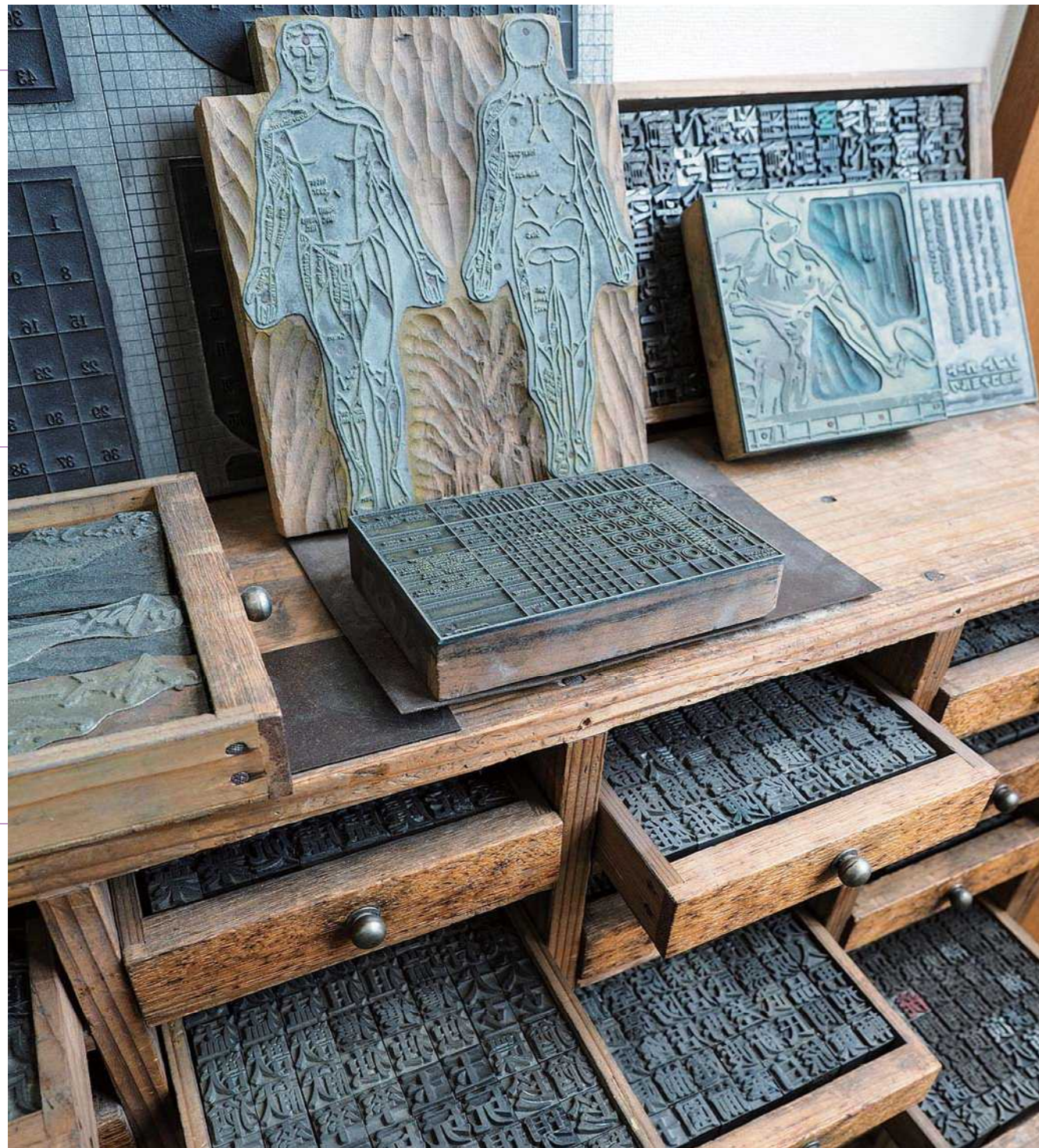
市民の読書推進や市町村立図書館の振興、書店人の育成などを目的に1995年1月、米子市に設立された。2012年3月にNPO法人化。①生涯読書推進②出版業界人育成③出版の未来像創造④「学びの場拡充」一などのテーマでシンポジウムやワークショップなどを行っている。



2006年からは「東京国際ブックフェア」会場で、「本の学校・出版産業シンポジウムin東京」を開催。記録集を毎年発行している



「大山緑陰シンポジウム」は1995年から5年間続けられ、5冊の記録集を残した



「本の博物室」には活版印刷で活躍した鉛活字もある

講座、絵本の原画展などを次々と企画。図書館と書店のお薦めの本を一枚のチラシにまとめて毎月発行している。

館長の伊東直登さんは「貸出冊数より、利用者を増やしたい。本屋さんや図書館が利用者を奪い合うといったレベルで物事を考えていたのでは本は衰退します。地域と書店と共に読書環境をつくって



2階フロアの「本の博物室」では、小説家の直筆原稿の複製や戦後間もなくに創刊された雑誌などを展示している

いきたい」と話す。

■**錨を下ろして**

書店・出版業界や関係分野の横の連携を強めるきっかけとなった第1回の大山緑陰シンポで、当時の岩波書店社長、故・安江良介氏は「高度情報化時代と地域」と題して記念講演し

た。「巨大な情報力がますます社会を支配しようとしている」。あふれつつある情報量におぼれることの危険、知恵を得ることの大切さ、それを育む地域の役割を説いた。

安江氏の問い掛けを、永井さんは「今も全く古くない」と捉える。インターネットが暮らしのすみずみに入り込み、情報の渦の中から何を選び取るかが問われている。書籍を取り巻く業界は紙の本と電子の本が併存し、目的に応じて選択できる時代を迎えた。一方で社会は人口減少に向かっている。

「大切なのは量ではありません。小さくても、クリエイティブな市民が知を蓄え、循環させていくことではないでしょうか。情報は漂流している。ただ流されるのではなく、錨（いかり）を下ろして深く考えることが大事なのではないでしょうか」

本の学校の活動、地域との協働の営みを、永井さんは「まだ過渡期にある」と感じている。市民自らが考え、創造する「知の地域づくり」は、研さんを積んだ担い手たちと共に次の時代に向かいつつある。



NPO法人 本の学校

〈概要〉 ●所在地:米子市新開2丁目3-10
本の学校今井ブックセンター・郁文塾内

●代表者:永井伸和

●構成員:正会員54人、法人賛助会員47法人、個人賛助会員125人(2013年末現在)

TEL 0859-31-5001 FAX 0859-31-9231
ホームページ <http://www.honnogakko.or.jp/>



代表者のコメント

理事長 永井伸和さん

地域が大きく変わろうとしているいま、地域の知的自立は大切です。出版文化とその構造の課題でもあります。「本」との出会いが育む、考え創造する市民と、地域の教育・文化・研

究機関、図書館、書店などのネットワークの広がり、地域の再生と自立に果たす役割があると思います。そのために21世紀の主役たちの自由な言論と提言の場を目指します。